
タローと座敷童子

箕風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タローと座敷童子

【Nコード】

N6218E

【作者名】

箕風

【あらすじ】

佐藤太郎の妖怪とのふれあいを書きました。

〜座敷童子編〜

僕の名前は佐藤太郎です。あまりにも標準的というかありふれているというかそんな感じ

じの名前ですが、以外に同姓同名の人って少なそうですね。

さて、これでも僕は特徴の無い人世界一としてギネスブックに登録されても誰も疑問に思わない人間ではないのですが、だからといってとりたてて特筆すべき点もありません。

しいて言えば幽霊や妖怪が見えることぐらいでしょうか。でも別にうれしくありません。

たまにうらやましがられるのですが、別に幽霊が見えようが妖怪が見えようがこれといつてメリットはありません。他の皆さんが幽霊や妖怪なんて見えなくても十分楽しく生きていけるのがその証拠です。

テレビにでも出れば金をもらえるのですが、恥ずかしがりやなので無理ですし、除霊なんかもできないので本当に役に立たない能力です。それでもそういうったものたちと話

くらしいはできるので、時折友人などからその類の相談を持ちかけられることはあります。

正直金にならなくて面倒くさいのですが、まあ恩を売っておくぐらいのことはしておけば将来なにか役に立つかもしれないのでとりあえず話を聞くだけは聞いています。

そうして流されやすいタイプの僕は、いつの間にもやら昔話の桃太郎の桃ぐらいの流されっぷりで、相談者の自宅で霊視することになっていました。

「なんだ、おまえは？」

舌足らずなおかつば頭の少女が不審者を見る目つきで僕をにらみつけています。いちおう

う言っておきますが、僕にそういう趣味はありません。女は40を越えてから寿命を迎えるまでが守備範囲です。

「君が座敷童子さんですか。こんにちは、佐藤太郎と言います」

自慢の太郎スマイルを向けながらとりあえず無難な挨拶をしておきます。子供とはいえ妖怪で初対面ですから。

「うわっ。笑顔がキモチワルッ。吐き気してきた」

なにか頭のほうでぶちぶちっ、と切れた音がしましたが気にしません。大人ですから。

「そうですね、それはすいません。それで、この家の人からクソ妖怪が住み着きやがった

から地獄送りにしたいと言われてそのクソ妖怪を退治しに僕は来たんですよ」

うん、素晴らしい大人の対応です。全国の若者諸君に見習って欲しいと思います。

「なに！マジか？」

「マジです」

ぶるぶる震えている姿を見ると、相当ショックだったようです。

ここらで追い討ちをかけてこの家を自発的に出て行ってもらいたいところですが、なん

だか泣きそうになっています。私という人間の構成要素の90パーセントを占める良心が

ものすごい勢いで痛んできます。ほおっておいたら死にそうなくらいです。

とはいえ見た目は子供ですが、座敷童子ならきつと何百年も生き

ているはずです。まさ
に見た目は子供、頭脳は……年を取れば大人になれるわけでもない
と思うので、やっぱり
子供ですか。ニートみたいなもんですね。

というわけでこのまま追いつくのもなんか可哀想なのでなにか別の
解決策を考えてみよ
うと思います。

「そもそも、どうして追い出されようとしているのか分かりますか
？」

実は相談者から事情は聞いているのですが、あえてここは自分で
自覚させる方法で問題
解決を図ってみたいと思います。

「なぜなのだ？ 私はこの家の人たちの役に立とうと精一杯頑張っ
てるぞ？」

不思議そうに首を傾げています。やっぱり分かってないみたいで
す。

「例えば、どんなことをしていますか？」

そう聞くと、座敷童子は自信満々に胸をはって言います。

「そうだな、例えば夜に子供部屋で子守唄を歌ったりしてるぞ」

一見、何でもなさそうにみえます。誰もいないはずなのに声が聞
こえてくる時点で恐い

ですが、そこはまあ許容範囲でしょう。妖怪ですから。

「どんな唄ですか」

「お、聞きたいか？」

座敷童子は目を輝かせています。僕が頷くと、そうかそうかでは
聞かせてやろうとやた

らうれしそうな顔で歌いはじめます。

「ねーむれー、ねーむれー」

順調な歌いだしです。相談者からはこの子守唄の内容せいで眠れ

ないと聞いていたのですが、いたって普通です。

「えーいえーんにー」

おや、さっそく雲行きが怪しくなってきました。これじゃ子守唄と言つより鎮魂歌です。

「ねーむれ、ないーならー、すいみんやくをーのみましようー」

間違つてはいないのですが、子守唄としてはどうなんでしょうか？

「それーでもー、ねーむれ、ないーなら、えーんずいをーたたきまじょー」

それは眠るというより気絶です。

「そこーまでー、やってーも、ねーむれ、ないーなら、瞬間接着剤でまぶた接着されたい

かいいかげんに空気読んで寝たフリぐらいしろクソガキ、ねーむれ、ねーむれ」

あれ？ いまなんか曲のリズムとか完全に無視した歌詞というか脅しのようなものが聞

こえたんだけど気のせいですか？

「どう？」

しかもここで終わりかよ！あまりに後味悪すぎる子守唄だな！

……はっ！いけない、想像の斜め上をいく子守唄のせいで語調が乱れてしまった。気を

つけなければ。

気を取り直して座敷童子の少女をみると、少女マンガのヒロインのごとくきらきらした

瞳で感想を求めています。その瞳に答えられるだけの感想は僕の心の中からは湧いてき

そつにありません。

「とても、斬新でした」

座敷童子は少しはずかしそつに微笑みます。どうやらよい方の意

味に取ったようです。

今気付きました但便利なことばですね、斬新って。

しかしこんなものを毎晩聞かされたらノイローゼになりそうです。
相談者の友人のため

にも何とかしなければなりません。

「でも、その子守唄はもう封印した方がいいと思います」

僕がそう切り出すと座敷童子はきょとんとしています。

「なんで？」

わけがわからないといった顔の座敷童子に、僕はどこかの博士のごとく人差し指をたて

ます。

「説明しましょう。その子守唄は座敷童子さんにとっての必殺わざ、つまり切り札みたい

なものなのです。切り札はやたらに使ってはいけないのです。こころぞというときまでとつ

ておかなければ切り札としての意味が無いのです」

座敷童子は切り札という言葉が気に入ったのか、ウンウンうなずいています。

「わかった。最後の魔王を倒すためにとっておく」

驚きました。そんな裏設定があったんですね。頑張ってください。
ちなみにボスは一回

倒すと大体変形するか真のボスが現れたりしますよ。

まあ、とりあえず第一の問題は解決です。

「他にはなにをしていますか？」

「皿洗い！」

自慢げに答えてくれましたが、どう考えても知らぬ間に食器が綺麗になつてたら気味が

悪くて使いたくなくなりそうな気がします。

ですが問題はそこではありません。友人も食器を洗ってもらえるのは別に構わないとい

うか、良いそうですね。性格が大らか過ぎるような気がします。
「その食器なんですけど、なぜか洗われたあとの食器の数が半分くらいに減っているらしいのですが」

座敷童子は口笛を吹き始めました。やっぱり話の逸らし方が古いですね。さすが座敷童子。

「どうなんですか？」

気分は2時間ドラマの断崖絶壁のシーンです。

座敷童子はきよるきよるしたりうつむいたりシエのポーズをとったり（何の意味があるのでしょうか？ 謎です）した挙句、

「形あるものはいつか崩れる。物も、人も。それが世界の真理さ、残念だけどね。けれどきっと心の中にある宝箱の中にその思いは宿っているはずさ。それを本当に大切にしているならね」

なんかかっこいい事言い始めました。どうでもいいですが皿の思いつてなんでしょうね？

「割ったんですよ？」

証拠は出揃ってるぜ、みたいな感じで言ってみます。

「ああそうだわリーかよ仕方ねーだる重力は上から下に働いてるんだから落とせば落ちて

壊れるんだよ文句あるなら重力見つけたニュートンに言いやがれ」
逆ギレされました。しかもニュートンは悪くないのにとばかりをくらってます。

「けど、いくらなんでも割りすぎじゃないですか？半分も割ってしまっなんて」

「……………」

あ、なんか座敷童子拗ねちゃってます。うーん、どうしましょう？
とりあえず、話題を変えてみます。

「他に何かお手伝いしていますか？」

すこし親しげに話しかけてみました。

「……W・Cの散歩」

よかった、答えてくれました。内容は意味不明ですが。

「……犬の名前」

あ、成程。犬の名前ですか。理解は出来ませんが納得は出来そうに
ありません。友人の家

族のネームセンスに恐怖を感じます。

「本名は、ウイナー・チャンピオン」

カツコイイ！なんかあらゆる勝負に強そうな気がします。変な想
像をした自分が恥ずかしいです。

「……散歩は、ちゃんとやってる」

座敷童子からすれば名誉挽回といきたいところですが、他の人に
座敷童子の姿が見える

わけないので傍からみれば飼い犬が脱走したようにしか見えないは
ずです。これでは、友

人のご近所づきあいに亀裂が走ってしまうかもしれません。

どうやら、根本的に見直す必要があるみたいです。そもそも、座
敷童子は人には見えな

い存在である自分の行動がまわりにどういう影響をもたらすのかよ
く分かってないみたい

です。何かいい方法がないか黙考してみますが、なかなか思い浮か
びません。なにもしな

いのがベストのような気がします。一応頑張っている座敷童子に
それをいうのも酷です

。「もういいもん。どーせあたしは無能の座敷童子ですよーだ」

僕が黙っていたので、すっかりいじけてしまったらしい座敷童子

が床に『の』の字を書
いています。

ん？ そうか！ いい方法が浮かびました。

僕は座敷童子にしばらく待っていてくれと言いつ残し、別の部屋にいた友人にとある提案をしました。友人は快く承諾してくれ、僕は準備をするためにホームセンターに向かいました。

「はい、どうぞ」

再び荷物をもって舞い戻ってきた僕は、律儀に待っていた座敷童子に一枚の白い板を渡します。

「なんだ、これ？」

はじめて見たらしい座敷童子は興味しんしんにその光沢のある板を見つめています。

「これは『ホワイト・ボード』といってその板の上にこのマーカーをつかって文字を書く

ことが出来るんです。なんども繰り返し使うことが出来るんですよ」とりあえず、使い方を簡単に説明してあげます。

ふーん、と座敷童子はうなずきますが、その表情からはだからどうした、といった疑問がありありと読み取れます。

「つまり、これを使えばこの家の人たちとコミュニケーションが取れるようになるんですよ。座敷童子の姿が見えなくても、声が聞こえなくても、書かれた

字を読むことは出来ま

す。物を持つことが出来る座敷童子なら、ペンを持って字を書けます。そうやって、この

家の家族の人たちから座敷童子にしてもらいたいお手伝いを書いてもらうんです。もしそ

れが出来なくても、意思の疎通が出来るなら教えてもらうことだって出来ますよ」

それを聞いた途端、座敷童子の顔がぱあっと明るくなりました。

「ほんとか？ お話できるのか!？」

「はい。この家の人たちもいいよ、って言ってくれましたよ」

実はホームセンターに行く前に友人にこのことを確認していたのです。いくら座敷童子

本人はよくても、家族の方々が嫌がってしまったては会話は成り立ちません。先走ってがっ

かりさせないためにも、ちゃんと確認しておいたのです。

僕の言葉を聞いて安心したのか、座敷童子は早速ホワイト・ボードに何か書き始めまし

た。よほどうれいのでしよう、頬が緩みっぱなしです。

座敷童子の子供らしい姿を見て、僕の頬も自然と緩みます。

やがて書き終えたのでしようか、ホワイト・ボードを抱えて友人がいる隣の部屋へ走っていきました。

と、なにか忘れたのか扉から顔だけ出し、

「ありがとう、タローさん！」

それだけ言ってまたパタパタと走っていきました。

ちょっとだけ、妖怪が見える自分のチカラが好きになりました。

あれから3週間たちました。

学校から下校しようとして鞆に教科書を詰めていると、座敷童子のこ
とで相談してきた友人

がまたやって来ました。

「どうやら、座敷童子が僕に会いたいと言っているようなのです。ずいぶん懐かれてしま

ったな、などと苦笑しながらもやっぱりうれしいものです。」

そのまま友人宅へ向かい、座敷童子の部屋へと向かいます。部屋まであるなんて、もは

や家族の一員みたいで、僕もうれしくなってきました。

「ひさしぶり、座敷童子！」

「ちょっとフランクな感じに話しかけてみましたが、予想に反して、座敷童子は元気があります。」

「どうかしました？」

「馴れ馴れしすぎたのかな、と思い口調を改めて聞くと、座敷童子は黙って指差します。」

その指先を追ってみると、そこには僕が買ってきたホワイト・ボードがありました。何かびっしり書かれています。

「近寄って見てみると、

3時までには掃除機かけておいてね(母)

帰ってきたらお酌してくれ(父)

ケーキつくって(杏)

洗濯物とりこんでおいてね(母)

夕食お願い(母)

今夜は一緒にお風呂入ろうか(おじいちゃん)

お手玉つくったから待ってるよ(おばあちゃん)

今日は一緒に寝よーね!(杏)

「……………」

すごい人気です。ところで友人の母は専業主婦だと聞いていた

のですが、なにをして

いるのでしょうか？（ちなみに杏とは友人の妹なのだそうです）

「タロー助けてくれ！このままでは死んでしまう！」

妖怪だから死ぬことはないでしょうが、過労で倒れるくらいはし
そうなほどに弱って

ます。これを見るかぎり、自由な時間はほとんどなさそうです。

「頼む！ タロー、後生だから！」

妖怪の後生ってなんでしょう？

と、いうわけで。

僕のアパートに新たな同居人が出来ました。

ちなみに。

いつときますけど、僕にそんな趣味はありませんからね！

お隣さん編（前書き）

とりあえず太郎の性癖全開で頑張りました。ほのぼのした雰囲気が出ていたらいいなと思います。

お隣さん編

こんにちは、みなさん。神宮寺明介です。

……すいません嘘つきました。佐藤太郎です。

最近のマイブームは、飲み終わったあとの野菜ジュースのペットボトルを放置しておく

、黒、赤、黄、オレンジ、白のカビがランダムに生えるので、その観察をすることです。

皆さんも試してみてください。

「あ、太郎。こんちわ」

さて、買い物を終えて僕の住んでいるオンボロアパートに帰ってくると、お隣の宮野明美

さんがちょうど扉から出てきました。

「こんにちは、明美さん」

僕も軽く挨拶を返します。もともと、このアパートは学生が多く入居しており、明美さん

も実は僕のクラスメイトなのです。

「ちょうどよかった。頼みたいことあるんだけど」

明美さんが軽くしなをつくってお願ひしてきます。たしか彼女はいま16歳なので、あと

24年は足りませんが、ご近所づきあいは大切です。

「いいですよ。頼みたいことってなんですか？」

「死んで」

「いいで、嫌です!!」

あまりにもにこやかに頼まれたのでつい承諾しそうになってしまいました。

「なんなんですか!いきなり死んでくれなんて!」

「だって、太郎の部屋ってウチの隣じゃん。ここって壁薄いから

さあ、隣の部屋の話

し声が聞こえてくるんだよね。んで、なんか知らんけど太郎の部屋からあんたの独り言

が一日中聞こえてくるんだけど。はっきり言ってキモインじゃぼけ

」

「……」

困りました。

実はいま、僕の部屋には訳あって少女が住み着いています。しかし少女の声は明美さんに

は聞こえるはずありません。

なぜなら、少女は座敷童子だったのです。

「まったく、独り言やめて死ぬかここから出て行って死ぬかどちらかにしなさいよ」

明美さん、どちらにしても死ぬ必要はないですよね？

「明日の朝までになんとかしなかったらあんたの部屋の扉の前に賞味期限切れの羊羹ぶち

まけとくからね」

そついうと、明美さんはふらふらとどこかへ行ってしまった。

さて、どうしましょう？

とりあえず、買ってきた荷物をしまわないといけないので部屋に入ります。

「ただいま」

「おかえり」

座敷童子が駆け寄ってきます。その光景に心が和みますが、こういうのが明美さんに独り

言と誤解されてしまうのでしょうか。

「お菓子は買ってきたか？」

座敷童子は早速買い物袋を漁っています。残念ながら買ってきません。

「けっ！ 役立たずが！」

座敷童子は舌打ちしてどうやらやりかけだったらしいゲームを再開しています。

というか、今の態度は何なんでしょう！ 仮にも居候の癖に！

「座敷童子、今の態度はなんだ！」

いくら妖怪でも躰はしっかりしないとイケません。

すると、座敷童子はゲームを中断して深々とため息をつきます。

「タロー、よく考えてみ？ あたしは座敷童子。わかる？ わ・ら・し。つまり子供なの

よ、こ・ど・も。普通なら留守番してる子供に菓子の一つでも買ってくるのが親の務めっ

てもんだろっが義務だろうが。その義務を果たしていないのは親子の契約違反だ。つま

りお前は私が訴えれば本来なら磔、釜茹で、車裂きの刑に処せられるはずなのだ。わかつ

たか！」

つつこみどころが満載というか、むしろつつこむところしかありません。

もうなんか面倒なのでスルーして、とりあえず明美さんから言われたことをなんとかして

みようとします。

「さっきそこでかくかく、つまりしかじかなんだよ」

「なんと！ではかくかく、しかじかなのか！」

便利ですな小説って。

「じゃあどうすんの？」

座敷童子の問いに僕はしばらく考え、

「またホワイト・ボードで会話するのはどうかな」と提案してみますが

「めんどい」

即座に却下されました。

まあ、話が出来るのにわざわざ書くのは僕も面倒なのであまりやりたくありません。

「なにか他に方法ある？」

座敷童子に聞いてみますが、ウンウン唸っているばかりで何も浮かんでこないようです。

僕の方もなにも浮かんできそうにありません。

「もういつそ開き直れば？」

座敷童子はそう提案してきますが、それでは明日には羊羹フェスティバルになってしまいます。

「行くところのない少女と同棲してるって素直に言えばいいんじゃない？」

その言い方だと多分明日からクラスでの僕の居場所が無くなりそうです。

ですが、他にいい方法も思いつきません。少なくとも妖怪であることを説明すれば、白い

目で見られることも無いと思うので、素直に打ち明けてみることにしてみます。

次の日。

「はあ、妖怪ねえ。そういえば太郎ってそういうの見えるって噂本当だったんだ」

登校しようとする明美さんを待ち伏せして、事情を説明すると案外普通に納得してくれました。

「案ずるより生むがやすしですね。

「でも以外。あんたって熟女好きじゃなかったっけ？」

なにか勘違いしているようですが、座敷童子とはそういう関係じゃないです。

「ふーん、そうなんだ。でもさ、どっちにしても太郎の趣味って絶対変だよ。普通は若

「い子の方がいいでしょ〜」

明美さんはわかっていません。全然分かってないです。

「いいですか、仮に若い子を探れたてのイチゴに例えましょう。確かに採れたてのイチゴ

はフルーティです。おいしいです。

しかし!!!

悲しいことに、それらは熟女の魅力には遠く及びません。なぜなら、熟女はまさにイチゴ

ジャムだからです！ 濃縮されたあの甘さ、そしてパンに塗ってもヨーグルトに混ぜても

ケーキの生地に混ぜてもベストマッチの、あらゆる要求にこたえられる対応力！ まさに

熟女は時間が築き上げる人類の至宝ですね」

明美さんもあと24年でその高みに到達できますよ。

「は、ははは。まあ、いいけどさ。それじゃあたし日直だから先いくね〜」

明美さんは気まずそうに去っていきました。どうやら熟女の素晴らしさを分かってもらえ

なかったようです。とても残念に思います。

「ロリは犯罪だけど、熟女は漢おとこへのステップなのに……」

「まったく、相変わらずなんだからな〜」

太郎の熱弁振りを思い出して、苦笑します。

「ま、一応まだ私にもチャンスはあるわけか」

明美は誰にも聞こえないようにつぶやいて、学校へと駆け出しました。

遊園地編 前編

こんにちわ。佐藤太郎です。

いまの夢は、はんぺんで作った抱き枕で眠ることです。叶うならば、はんぺんで作った寝具一式も欲しいです。まるで、雲に包まれているみたい。

……ときどき、自分というものがよく分からなくなります。

今日は、なんと遊園地に来ています。

僕と座敷童子の二人で。

というのも、最近近所に遊園地が出来たことを座敷童子に話してしまつてから、連れて行つてくれとせがまれていたからです。

当然、座敷童子の姿は他の人には見えません。

僕は受付の人から切ない視線を受けながら、一人でフリーパスを買いました……。

「あれ乗りたい！」

遊園地に入った途端、座敷童子が指差します。その先にはジェットコースター。ありえませんが。

「無理。他の乗りものにしなさい」

「なんでだ！ あれがいい！」

「駄目だよ。ほら、あの看板を見てみな」

僕がそういつて指差すのは、『この赤いラインに届かない子は遠慮ください』という遊

園地ならどこでも見かける看板。

「身長が座敷童子は低すぎるから無理なんだよ。あきらめなさい。それにそもそも座敷童子は

見えないんだからああいう乗り物は無理。観覧車とかにしなさい」しかし座敷童子は納得してくれません。

他にもなんやかんや提案しますが、ジェットコースターを見つめるばかりです。

仕方ないので、とりあえず行くだけ行ってみることにしました。

「おお、並んでるな」

座敷童子は嬉々とした表情で列の最後に並びます。

まあ、並んでるといっても所詮地方の遊園地なので、5、6人ぐらい。

一応今日は休日なのですが、園内は閑散としたもので、なんだか経営状態を心配してしまいます。

そんなことを無為に考えていると、ジェットコースターが戻ってきて、順番が回ってきました。

前の方たちがどんどん席に着き、僕も流されるように一つの席に座ります。

と、座敷童子も滑り込むように僕のと成りの席に滑り込みました。ここまでくると、僕としても別にいいかな、なんて思ってしまったていました。

妖怪だから落ちても死なない、と思いますし、なにより本人の希望なのですから。

……いや、落ちるところを見てみたい、なんて非道なことば思っ

ませんよ？

自動的にバーが降りてきて、体を固定されます。
隣の座敷童子はうきうきとした表情ですが、すでに体がずり落ちそうになってます。俗に言う死亡フラグです。

そして発車。
ガタゴトと、ゆっくりと斜面を上っていきます。その振動で座敷童子の体がどんどんずれ落ちていきます。さすがにやばいと感じたのか、バーに捕まりながらこちらを不安げに見つめてきますが、その姿に僕はすごい期待感を胸に膨らませます。
そして、頂上。急加速！

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああ
ああ！！！！！！！！！！！！」

体がバーの間からすっぽ抜けて飛んでいく座敷童子。
それを大爆笑で見つめている僕。
どこかでグチャ、というなにかつぶれた感じの音がします
が、そこはスルーしときましょう。

あれからすぐに探しに来ると、座敷童子は普通に道に落ちていました。

「……………はじめて、死ぬ、かも、しれない、と、思った」

途切れ途切れにつぶやくと、座敷童子は気を失いました。
まあ見たところ外傷はないようなので大丈夫でしょう。その間になにか飲み物でも買って
くるとしますか。

僕が割高なメロンソーダを両手に持って戻ると、座敷童子はすでに復活していました。
メロンソーダを渡すと、コクコク飲みながら、とある方向を指差します。

「あれ乗りたい」
その先には、フリーフォール。

何なんですか、この子は。学習能力がないのですか？ それとも自殺願望でも持っているのでしょうか？

……まあ、おもしろいからいいですけど。

「うんぎゃああああああああああああああああああああああ
！！！！！！！！」
落ちていく座敷童子。

僕の方は地面の手前ところで止まりますが、座敷童子はまさしく自由落下&激突。
目の前でつぶれる座敷童子はある意味ネットのグロ映像よりもショッキングです。

「………………あたしの背中には飛べない翼が……………」
なんか意味不明なことをつぶやいていますが、大丈夫、でしょう？
多分。

座敷童子もさすがに懲りたらしく、今はおとなしく観覧車に乗っています。

外の景色を眺めてはしゃいでる姿は、たとえ何百年も生きている妖怪でも子供らしいものです。

「人がゴミだ！」
「いやいやいや。」

有名な台詞をパクろうとしてるのは分かりますけど、断言しちゃ駄目です。

「なあタロー、ここから落ちたら死ぬかな？」

「座敷童子は分からないけど、僕みたいな普通の人間は死にます」
座敷童子はなにやら考え込みます。そして僕を見ると

「なあ、なんか座敷童子って言いにくくないか」

「まあ、それは」

「なんか良い感じの名前つけてくれ」

「名前？ もともとの名前は無いのか？」

「……………無い」

座敷童子は目を逸らしながら答えます。なにやら名前に関してなにが触れられたくないものでもあるのでしょうか？

まあそれは置いといて、何か名前を考えてみることにします。

「トメ」

「やだ」

「お良」

「やだ」

「お銀」

「なんでさっきから時代劇にでも出てきそつな古臭い名前ばかりんだ！」

「古臭いとは失礼な。全国のとめさんお良さんお銀さんにあやまりなさい！」

「……ごめんなさい。でもなんかこう、今風の名前が良い……」
座敷童子は僕を上目遣いの潤んだ瞳で見つめてきます。

うーん、今風の名前ですか。とはいえ、着物におかっぱ頭の座敷童子には似合わなそうですか。

「樹理亜、とかはどうだ」

「もつと日本的な名前が良い」

なかなか注文が多いです。

「凜、なんてどう？」

我ながらなかなか良い感じの名前だと思います。しかし、座敷童子はいまいち反応が良くありません。

「なんかパンチが効いてない」

またすごい注文がきました。名前にパンチですか。この子の理想の名前が恐くなってきます。

「えーと、狂うに、虚空の虚で、狂虚きょじょなんてどうだろう」

暴走族みたいな当て字に自分でもどうかと思いましたが、案の定、座敷童子も納得できないようです。

「座敷童子、新しく名前をつけるよりも、あだ名にしたらどうだ。

その方が親しみがあっていいだろう。名前ほど堅苦しく考える必要も無いし」

僕の提案に座敷童子も頷きます。

「せっかくなんで、座敷童子からとろうか。ざ・し・き・わ・らし。うーん、シキちゃんなんてどう？」

「おお、いいんじゃないか」

座敷童子も目を輝かせます。

どうやら、ご満足いただけただけで僕としてもうれしい限りです。

座敷童子改めシキちゃんは、僕に呼ばせたり、自分で連呼しながらはしゃいでいます。

やがて観覧車も一周して、僕たちは再び大地に降り立ちました。

後半へ続く。

遊園地編 中編(前書き)

すいません。3部構成になりました。

「あれに乗るのか？」

「うん！」

「どうしても？」

「どうしても！」

「絶対？」

「絶対！」

「どうやらマジらしいです。ん、なにがマジかって？」

それは僕の目の前にある乗り物『コーヒーカップ』。

カップルが乗れば楽しい乗り物、友人と乗れば悲しい乗り物、一人で乗ればイタイ乗り物。

それに、シキは乗りたいというのです。

確認しますが、シキの姿は他の人には見えません。

僕の姿は当然見えます。

お分かりですね？ つまりシキと乗ると、僕が一人でコーヒーカップに乗るイタイ奴だと思われてしまうのです。

いくらこの遊園地が寂れているとはいえ、客が全く居ないわけではありません。それに、観覧車と違って乗っている間もまわりのひとに見られ続ける、いわゆる羞恥プレイです。

いくらなんでも耐えられません。

いや、よく考えてみれば遊園地はそういう乗り物ばかりですけど

……。

「なにしてんの、早く乗ろーよ」

僕の袖を引っ張るシキ。

必死で抗う僕。

拮抗状態が続き、埒が明かないと思ったのが、シキがこんな提案をします。

「じゃんけんで決めよう」

「わかった、じゃあ僕はグーを出す」

心理戦です。間抜け、いやいや、純粋なシキはパーを出すでしょう。

「よし、いくぞ。最初はグー」

？

なんかシキがパーを出しています。

「やった、勝った」

うれしそうに飛び跳ねるシキ。

「いやいや。ちょっと待て、最初はグーだろ」

「？ だからお前はグー出したんだろ。だからパーを出して勝った」

「いやいやいやいやそうということじゃなくて。最初はグーはなんと
いうかじゃんけんの通過儀礼というかとにかく最初はグーをださな
きゃ駄目なんですよ」

「だからお前はグーを出したんだろ。出すって言ったんだから」

ああああああ。どういえばこのアホは分かってくれるのでしょうか。

「ほら、負けたんだから行くぞ」

さっさと先に行ってしまうシキ。

分かりましたよ！ 行けばいいんでしょいう行けば！

「わはははっ」

楽しそうなシキ。

「……………うぶっ」

吐きそうな僕。

しかも周りからの「あいつ男一人でコーヒーカップ乗ってるよ」と
いう声が僕の精神を磨耗させていきます。

さらに回転をあげるシキ。

ばかやろう何してんだ、と止めたいのですが、恐らく口を開いたら多分この遊園地に一生これなくなりそうなので必死に我慢します。

さらに回転をあげるシキ。

なんなんですか？

こいつは僕に恨みでもあるのですか？

座敷童子は幸福をもたらすのではなかったのですか？

今僕にもたらされているのは吐き気ですよ。

さらに回転をあげるシキ。

本当に限界なんですよ？

シキは僕の顔を見て分からないのでしょうか？

いい加減にしなさいよ。

まじでほんとにきつ……。

さらに回転をあげるシキ。

……………おえつ。

「なんだ、なんでそんなに落ち込んでるんだ」

「……」

「あれか？ 吐いたことか？ 気にしないでいいと係員がいつてたじゃないか」

ええ。そうですよ。吐きましたよ。そりゃもう見事に回転するカップからぶちまけましたよ。

一人コーヒーカップからげろを撒き散らす男。

もはやこの僕に恥ずかしいことなんて何一つありません。いまなら公衆の面前で裸になって「僕はこの世界を救いたいんだ！」と叫べそうです。いや無理ですが。

恨みがましい視線をシキに送りますが、本人はどこ吹く風。

これは、仕返しをしてやらねばなりません。

「次はあそこに行くぞ」

僕が指差したのは、お化け屋敷。

途端に、シキの表情が凍ります。

「あんなところ行っても面白くないだろ。お前はどこでもお化け屋敷みたいなもんなんだから。それよりあつちの……」

「シキ？ まさか妖怪のお前が恐いの？」

「そんなわけないだろが！」

かかった。プライドだけは人の10倍ぐらいあるシキがこう言われ言い返さないとがえないのです。

「じゃあ問題ないな。僕はどうしても今日はここに来たかったからぜひ行こう」

「……ああ、いいだろう。行ってやるうじゃないか。逆に脅かし返してやるわー！」

そう言つて、お化け屋敷に向かうシキ。

それをみてほくそ笑む僕。

あなたの敵はお化け屋敷の中だけじゃないですよ？

「ほら、お前恐いだろ？ 手つないでやる」
そういつて僕の手をつかんでくるシキ。まあ、まだいいでしょう。
僕も手をつなぎます。

二人で手をつなぎながら歩いていくと、目の前にはガイコツの人形が。あからさま過ぎて、さすがに恐くありません。それはシキも同じようで「はん。こんなんで驚くか。ばーかばーか」と悪態をついてます。

その隙に僕はシキの死角に回り、先ほど買ったメロンソーダのストローを取り出します。
そして、シキの首筋をおもいきり吸い上げて。

ちゅっつゅっつゅっつゅっつゅっ

「ひゃあああああああああ」
途端に暴れるシキ。

すぐさま僕はストローを隠します。
笑いをこらえて、どうしたんだ、と聞いてみます。

「……いや、なんかめっちゃめっちゃでかい蚊に吸われた様な」

「気のせいだ」
「そうか」

不審がりながらも、首をしきりに気にするシキ。
そのせいで、つないでいた手が離れます。

さて、作戦を実行するときに来ました。

実はこのお化け屋敷は最初のガイコツで、なんだこんなものか、と安心させて一気にその穏やかな心を叩き潰す最悪な展開になっているのです。さきにパンフで下調べしていたのでばっちりです。

では、僕が次にとる行動はみなさんお分かりですね？

「なあタロー。なんだかここは拍子抜けだな
シキが振り向いた瞬間

「うがあああつあああああ

「うきやあああああああ

奇声を上げて走り去る僕。

呆然と残されているシキ。

さあ、楽しんでくださいね？ お一人で。

「きゃあああああああああ

さて、一足先に出た僕は、お化け屋敷の中から聞こえてくるすすまじいシキの悲鳴を爆笑しながら聞いています。

「ぎよあああああああああ

「でろっ たげるがあああああああ

「あばっばばばばばばばばばば

「……………」
「お、出てきました。」

「りんびょうとーしゃー……………悪霊退散……………なむあみだー」
「なんかすさまじくやつれています。」
「僕はすべて突っ走ってきたのでいまいちよく分からなかったのですが、やはり凄いいみたいです。というか、妖怪がお経となえて大丈夫なんですかね？」

うつろな目で僕を見上げるシキ。
「にっこり微笑んで僕は」

「楽しかった？」

「うがあああああ」

シキはどこかに走り去っていきました。

遊園地編 後編

「シキー」

「シキちゃん」

「シキーさーまー」

困りました。

見つかりません。

あれから逃亡したシキはどこへいったのやら。僕も最初は放っておいて一人でなんか楽しんでたんですが、1時間立つても2時間たつても戻ってこないの

で、今探しているところです。

「シキー。出て来いー。今出てきたらお前の好きなリポDやるからー」

あの妖怪栄養ドリンク好きなので。

「シキー。出て来いー。今出てきたらお前の好きな堂本剛版の金田一少年の事件簿をツ

タヤでまとめ借りしてきてやるからー」

なんか「他のやつは駄目だ」とこだわっているの。

「シキー。出て来いー。出ないと目玉をほじくるぞー」

……駄目です。シキの大好きなパロディネタでも出てきません。

うーん。やばいですね。そろそろ閉園時間だというのに。さすがに置き去りは良心が痛むので、なんとか見つけないと。でも、シキの姿は見えないから係員の人に協力してもらったところで意味が無いし。

ああ、どうしようどうしよう。だんだん焦ってきました。

よし、こんなときは！

あわてないあわてない。一休み一休み。

ぼくぼくぼく……………チーン。

いい案浮かばねえ……………。

つてこんなふざけてる場合じゃないですね。

ああなんかもうめんどくさくなってきました。別に妖怪だから野垂れ死ぬことはないでし

ようし、獅子はわが子を谷に突き落とすといいますが、ここはひとつ我侂なシキを成長

させるためにも放置して帰り……………。

いや、やっぱりやめましょう。

僕も経験あるから分かりますが、迷子ほど心細いことはないの。

なんだかこのまま自分

はずっと一人なんだろうとかネガティブなこと考えちゃうんですよね、迷子のときって

。まあ、シキの場合迷子ではなく逃走ですが。とはいえ、どうしたものでしょう？

時間もないし、人をつかつてのローラー作戦も無理となってます……。

当園は、もうすぐ閉園時間となります。

やばい。放送はいりました。マジでどうにかしないと……。ん、放送？

ああ、そうか。なんだ、簡単なことでした。

僕はすぐに、係員さんに事情を説明して、とあることをしてもらいました。

怨念町からお越しの、佐藤シキちゃん。佐藤シキちゃん。お兄ちゃんが入場ゲートの前でお待ちです。至急入場ゲートの前までおこしてください。

おお、放送が入りました。そうです、こうして放送をしてもらえば向こうからやってきてくれるはずです。……まあ、シキが怒っていなければですが。

……

……来ました。

シキです。

やっぱり怒っているのか、こちらを建物の影から窺っています。

でも、声が聞こえるならば、僕にはまだ奥の手があります。最終手段が。

「シキー。はあ、どこいったんだろ。今頃ひとりでピーピー鼻水たらしながら泣いてるの

だろうか。それともアリの行列でも眺めながら「私はこの世界の塵の一つにすぎない」と

か恥ずかしいこと考えてるんだらうか」

「誰がそんなことするか！ アホタロー！」

ほら、出てきました。ほんとプライドだけは高いお子様です。でもまあ、今はそれにも感謝です。

「ほら、さっさと帰るぞ」

「……」

「まさかシキ、ほんとにそんなハズカシイことを考えて……」

「するかバカ！」

「ふーん？ まあいいや。とにかく閉園だから帰るぞ」

不機嫌そうな顔しながらも、おとなしくついてくるシキ。

二人、てくてく歩いて帰ります。

「タロー」

「なんだ」

「謝れ」

「ごめんなさい」

「シキ」

「何」

「謝れ」

「ごめんなさい」

「一応言っておくが」

僕が言います。

「一応言っておくけど」

シキが言います。

「「ゆるさないからな」」

「ふふっ」

「くくっ」

そして、なんだかよく分からないですが二人とも可笑しくなって、笑い出しました。

不思議ですね、人間って。あと妖怪も。

まあ今回もいろいろありました、終わりをければすべて良しということで。

楽しい遊園地でした、っと。

バイト編 とりあえず前編

毎度お待ちかね、佐藤太郎です。

今一番やってみたいことは、コンビニで年齢制限のあるお酒やらタバコやら性的興奮を催させる雑誌をカゴいっぱい詰め込んでレジのところへ行き、いざお会計というときにまるで財布を忘れたように体をぺたぺた触り、「やべっ、歳とってくるの忘れた!」といってそのまま逃げてみたいです。

「タロー」

「なに」

「あれ食べたい」

そうやってシキが指差すのは、テレビ画面に映された有名なホテルのレストランの料理の数々。

「無理」

シキは少し唸って、それからチャンネルをかえて、他のグルメ番組にします。

そこに映っていたのは、おいしそうな中華料理。

「あれ食べてみたい」

「無理」

「なんでお前はそうやって何でもかんでもむりむりむりむり、ってゆうんだ! 抗えよ! 戦えよ! 勝利は僕の歩いた跡に刻まれているものだ、って言うてみせろよ!」

「戦ってもいいけど、その後の約一ヶ月に及ぶ絶食に耐えられる覚

悟はお有りですか？」

シキが黙りこみます。うちの経済状態を知っているからこそ、現実味のある未来予想図が見えているのでしょうか。

「あのさあタワー？　なんでこんなに貧乏なんだ？」

……はああああ。それを訊きますか。訊いちやうんですか。

オンボロアパートで一食のおかずは一品が基本というか絶対のルールでそのおかずも週

に2度ぐらいは野草を摘んできたもので冷房暖房設備は皆無で水道代節約のために公園か

ら水を汲み夜になると電気代がかからない様にすぐに寝てお風呂は基本的に水風呂でどう

しても寒さを我慢できないときは乾布摩擦してからやっぱり水風呂でそういえば遊園地に

行ったときはマジで僕が密かに貯めていた貯金をすべて使い果たしてしまいましたっいたらなん

で遊園地なんかに連れて行ったのかというとそれはシキにせがまれると断れない自分がいるわけ。

つまり、僕はシキに甘いのです。……あれ、なんか言いたいことがずれてしまいました。

まあ結局、自分の食い扶持は自分でという今の社会問題であるシートや引きこもりが強制的に更正せざるを得ないようなうちの両親の方針でこのような極貧

生活を送らざるを得ないわけなのです。

苦学生というより、四苦八苦学生ですねこれじゃあ。

「すべてはわが両親の深謀遠慮をめぐらせたというよりはただ単純

僕が嘆息すると、シキは不満げに唇をとがらします。

「何で不安なんだ。わたしは自分で言うのも何だがかなり有能だぞ」
そういえば家事手伝いスキルはかなり腕を磨いたみたいでしたね

(座敷童子編参照)

でも、シキは言うまでもなく妖怪なわけで、その姿は普通の人には見えないわけで、そん

なんでどこかでバイトなんて……。

すると、シキがわが意を得たりとばかりニヤリとほほ笑みます。

「ああ、どうせお前はわたしが妖怪だからどこかで働くことなんて出来ないとも思っ

るんだろ。安心しろ、わたしだってそんなくらいはわきまえてる」

腕を組んでふんぞり返るシキ。それを期待0・2、嫌な予感98
8で見つめる僕。

そして、シキは言い放ちます。

「妖怪退治で荒稼ぎだ!!!」

つづく。

バイト編 その2

僕はシキを疑いのこもったまなざしで見つめます。

「シキってそんなに強かったっけ」

座敷童子が戦うなんて話聞いたことないのですが。

するとシキは人差し指をたて、ちゅちゅちゅ、と左右に振ります。

「今の時代単純な力よりも頭脳がものをいうのだ！」

自信ありげにそう言いますが、僕としてはその方が余計心配なんですけど。

「それに今の時代そんな化け物みたいに強い妖怪なんてそうそういないから心配すんな。ど

うせそこらの低級妖怪とか幽霊とかをボコボコにしてやれば依頼人からがっばがっば金が手

に入るぞ。あははははは」

高笑いしてますが、いい加減に自分の能力がどの程度のものなのか理解して欲しいです。僕

の見立てではおそらくその低級妖怪とやらにフルボッコにされる可能性が9……、いや10

0パーセントなのですけど。

「だいたい依頼人だっけどうやって探すんだ」

シキは何を言ってるんだ、というような顔をしてこちらを指差します。

「僕？」

「他に誰がいる」

いやまあ確かにそうなんですけど。例のごとくシキは普通の人間には見えないので仕事を取

ってくるのも無理ですしね。

「適当に心霊関係でお困りの方居ませんか、って言いながら歩け

「ば誰か一人くらい引つか
かるだろ」

何そのさおだけ屋みたいな売り込み方は。

「しかしそんな人がいたら、僕ならまず間違いなく近づかないけど
ね」

「そこを何とかするのがタローの役目だ。そこから先は私に任せて
おけば万事解決。一攫千

金。豪華絢爛。夢が膨らむな、タロー！」

ああ、シキの顔が宝くじを買うホームレスのごとくにやけています。
僕は嘆息しながらも、とりあえず了解して依頼人を探してみること
にしました。

次の日、学校での放課後。

「で、私に頼みたいことって」

明美さんが訝しげに問うて来ます。

実は、交友関係の広い彼女に依頼人探しを協力してもらおうという
腹づもりで彼女に話を聞

いてもらっていたのです。ですが、明美さん少し緊張しているみた
いです。なぜでしょう？

まあ気にせず本題に入ります。

「実は、かくかくしかじかくしかじかくしかじかなのです
よ」

「なに、言語障害？ それなら病院いきなさい」

あれ、通じませんでした。ノリが悪いですね。

「つまり、なにか妖怪とか幽霊関係で困っている人を探してるんで
す。それを有料で解決す
るために」

「何がつまりなのかはさっぱりだけど、分かったわ。一応探しとい
てあげるから。話はそれ

だけ？」

「はい。ありがとうございます」

僕が頭を下げると、明美さんは少し落ち込んだように表情を曇らせました。

そして何か思いついたように「そういえばさ、あんた週末暇？」と尋ねてきます。

「えと……、多分暇です」

シキがなにかふざけた事をしなければ。

もしよかったらさ、と言いつつ明美さんは何かを鞆から取り出ししました。

「映画のチケット。余ってるからあげるわ」

「ほんとですか！ありがとうございます」

僕は明美さんの優しさに感謝しました。この人はきつと将来大物になるはずです。

そして明美さんは

「じゃね」

と言つとすぐにひらひらと手を振って去っていきました。

さて、果報は寝て待てといいますが、後は明美さんに期待するとして、僕はバイトにでも行きますか。

バイト編 その3

僕のバイト先は、少々、というかある程度、……すごく変わっています。

「へい！へい！へい！まいどうーありがとーござーまじとーあー」
「ういいらつさああいまっつせー」

僕が裏口から店に入ると、威勢のよい掛け声が聞こえてきました。ちなみに、僕のバイト先はすし屋ではありません。ラーメン屋さんでもありません。意表についてパン屋さん、でもありません。

「うおう！タローかああ！」
バックルームにいた店長が僕を見つけるなり近寄ってきて、背中をばしばし叩きます。しかし、痛くはありません。店長は虚弱体質なので、あんまり力を入れるとすぐにへばってしまいます。しかしなぜか声だけは凄いのです。たぶん、声にのみ力を入れすぎて他に回せなくなっているのだと思います。

「うおおはつようー！ さっつそおおくしいいごとうううに入っつてもおおおらえるうう？？？？？」

僕は頷き、

「わっつかりまつしたああ」

はい、これはこのお店の鉄則なのです。

この口調を接客中は保ち続けなければなりません。

なんでこんなわけ分からん口調のなのかというと、単なる店長の趣味です。

こんなバイト普通ならやりませんが、時給がなんだか恐ろしいほど高いので金銭的に苦しい

僕は背に腹を代えられずここで働いているというわけなのです。

エプロンをつけ、僕は売り場に出ました。そこには、数人の女性客がガラスケースを眺めて
キャピキャピ（死語？）しています。

「えっと、ショートケーキ3つにチーズケーキ2つ。あとフルーツタルト2つください」

「はあああいよろこんでええええっ!」

皆さんお分かりですね。そうです、ここはケーキ屋です。

小さな店なのですが、一口食べれば間違いなく白目をむいて泡を吹くほどのおいしさと評判

で、主に若い人たちの罰ゲーム用品として欠かせないものになっています。

「このフルーツタルト凄いいんだよ。前に食べさせられたんだけど、それから3日間眠り続け
たんだから」

「でも最高はやっぱりショートケーキでしょ。一口かじっただけで吐血するんだもん」

「二人とも甘いね。……ここには裏メニューがあつてね、そのパン
プキンタルトは食べたものを魔物にかえるらしい」

なんだかとてもなく恐ろしい会話をしているお客さんたちですが、それが真実なのだから

笑えませんかよね。この店はケーキ屋ではなく殺し屋のほうがふさわしいと思います。

というかいまだに死亡者が出てないのが謎です。

「おつつつまたせえええすいいましいいたああ！ まあたこ
れたら来てねええええ」

僕がケーキを詰めて渡すと、お客さんたちは一様に怪しい笑みを浮かべながら、”自己責任

”と大きく書かれたケーキの箱をぶら下げて去っていきました。

僕は店長の方を振り返ります。

「店長、お客さんいなくなりました」

「そうか、じゃ休憩してくれ」

「分かりました」

確認しておきますが、この店長はさつき奇声を発していた人です。

客がいる場合のみ、あの口調にしなければなりません。店長は頭はおかしいですが本来

はとてもいい人なので、僕はいまだにバイトを続けています。時給も高いですし。

しかも一時間に一度くらいしか客が来ず、その間は自由にしている構わないという労働条件

なので、僕はこの時間を自分の勉強時間にも当てています。うん、とても素晴らしい職場で

すね。金があつたらすぐに辞めますけど。

バイト編 その4

そうして僕が気だるいバイトを続けていると、携帯にメールが届きました。

貧乏ですが、携帯がないと連絡手段がなくなりバイトにも支障が出るので、泣く泣くもっているのです。

メールを確認すると、差出人は、明美さん。件名には、さっきのこと、と書かれています。

はてさてなんだろうと本文をみると、どうやら妖怪退治の件で、宇野ちあきという人が依頼したいのだというのです。

いくらなんでも早すぎるだろ、と突っこみを入れながらも明美さんに感謝して、僕はシキが喜ぶだろーなーなどとぼんやり考えていました。

バイトを終えたあとに、とある場所に寄り道をして臨時収入を得た僕が意気揚々と帰ると、

シキが雑草を食べていました。

思わず涙がこぼれました。

「シキ、いくら腹が減ったからって……それはないだろ」
僕の言葉に、もそもそと雑草を食んでいたシキがうつろな目でこちらを見返します。

「ハラ、ヘツタ。ナニモ、ナイ。ダカラ、クサ、タベル」

うわぁ、カタコトですか。もう見えていて痛々しいです。

今更ながらにうちの経済状況を思い知らされて、愕然とされられましたが、僕はすぐさま笑

顔を取り繕ってシキに微笑みます。

「そうだシキ。お前が言ってた妖怪退治の依頼の件、さっそく仕事が入ったぞ」

「なに！ほんとか！」

途端に目に精気が戻ったシキに安堵しつつ、僕は大仰に頷きます。

「すぐにも来て欲しいそうさ。どうする？明日にでもいくか」

「もちろんだ！」

シキが目を爛々と輝かせながらいうので、思わず苦笑してしまいなから、僕は明美さんから

教えてもらった依頼人のアドレスに返事を送りました。

「で、どんなやつが相手なのさ？」

「いや、具体的なことについては依頼人から直接聞いてくれてことだから、実は僕もよく

わからない」

「そーなのさー」

さして気にした様子も無く、シキは答えます。と、何か思いついたようにシキはどこからと

もなく一枚の紙切れを取り出しました。

「ん」

「なにこれ」

その紙切れには、なにかお店の名前らしきものと、住所、電話番号が書いてありました。

無言でこちらの様子を窺っているシキ。

……しばし考え、ようやく僕は思い当たりました。

「仕事を片付けたら、この店の料理が食べたいのか？」

「たまにはいいだろ！お前の方もおごってやる！」

とらぬ狸の皮算用とはいえ、なんだか娘の初月給でご馳走してもらう父親のようなよく分か

らない気分になりながら、ほんわかした気分になりました。

「そうだな。じゃあ仕事を無事終わらせたら買ってくるから」

僕の言葉に、シキはうれしそうに顔をほころばせました。

次の日。

僕は日曜で学校が休みなので、朝からシキを連れて依頼人の家に向かいました。

住所がバイト先の近くだったので、特に迷うこともなく到着するとそこには目を疑うよう

な家がありました。

いや、これを家と呼んでいいのかすら疑問です。

まず、目に入るのはブルーシートです。

端にある木の棒（おそらく柱と思われませんが、表現としては木の棒の方が適切です）にくく

りつけられています。

わかりやすく言うと、警察がなにか事件が起こった場所を覆っているときに見るアレです。

で、そのブルーシートには透明なビニール袋に入った紙がくっつけられています。

『宇野』

………苗字ですよ、これ。おそらく表札なのでしょう。ええ、わかります。分かりますとも。

隣で、なんともいえない顔をしているシキが言いました。

「これ、うちよりもび………」

「さあ、仕事だ仕事！ 初仕事だから頑張らなきゃな！」

「でも、これ………」

「さあ、早く仕事終わらせてうまいもの食べようぜ！」

僕は無理やり話を終わらせると、呼び鈴もノックもできそうに無いので、大声で宇野さん

と呼びかけました。

バイト編その5

「……」

……返事がない、ただの屍もとい、ただの廃墟のようだ。

このままあきらめて帰った方が良さそうではありますが、せっかくのシキの初仕事。なん

だかよく分からないままに終わらせたくはありません。

「宇野さー！ーん！ いませんかー！ーん！！！！！」

もはや近所迷惑といっても過言ではないレベルで呼びかけてみます。というか壁がブルーシートなので聞こえないはずはないんですが……

……。僕たちがこの時間

に来ることはあらかじめ知らせてあったから、出かけているということもないはずですし

……。

「君、宇野さんたちのお知り合いかなあ？」

突然後ろから問いかけられて振り向くと、絶句しました。

スキンヘッドにサングラス、金ぴかのネックレスにでかい時計。も

う一人はパンチパーマ

に頬に刀傷らしきものがある、ドラマなんかでよく見るテンプレ通りの、ヤのつくお仕事

の方々がいらつしやっただからです。

「もしかして親戚？ あ、同じくらいの娘さんいたからお友達かなあ？」

パンチさんものすごい顔近いです。ちょっと首動かしたらチュってなっちゃいますよ？

まあ威圧してるんでしょうが、僕の心は高鳴っています。

……え、うそだよな？ どうしちゃたんだ僕！？

「……あう、その、く、クラスメイトなんですう」

「あ、そ、そうなんだ」

我ながら気持ち悪い言い方をしたと思ったけど、それほど露骨に引かなくてもいいと思います

ますよパンチさん。

「宇野さんたちどこ行つたか知らないかな？」

パンチさんしゃべり方が事務的になりましたね。

「僕も、今来たばかりで分からなくてえ……。お役に立てなくて、申し訳ないですう」

……」

「いや、気にしないでいいです。兄貴、ここにはいないようです。行きましょう」

僕が半歩進むと2歩下がるパンチさん。なんだろう、僕のイケナイ野生が目覚めているの

でしょうか？

まさかこれが……ヒトメボレ!?

高鳴る鼓動！ 僕のソウルが弾ける！

「お前、大丈夫か……？」

折れたシャープペンシルの芯でも見るような目でシキに見られて、我に返りません。どうし

たんでしょか僕？ それとも元々、熟していれば女性でなくてもよかったですということな

のでしょうか？ それだとストライクゾーンが大幅に拡張されそうです。

「それじゃ、宇野さんにあつたら伝えといてください。篠崎が連絡待ってるよ」

言い捨てて、さっさと去ってしまったお二人。あ、パンチさんに携帯の番号聞いて置けば

よかったです……。

「なあタロー、あれは俗に言う借金取りというやつではないか？」

「……………」
「宇野さんとやらは、たくさんお金を借りていて返せないんじゃないか？」

「……………」

「たぶん仕事しても、報酬とかもらえないのではないか？」

「……………」シキ、帰ろっか」

「……………」うん」

「止まれ。動くな」

またしても背後からささやきかける様に聞こえてくる声。今度はな
んですか？ 殺し屋で

すか？

「振り向かずにその場でジャンプしろ」

いきなり命令口調で言われて、仕方なく僕は要求どおりにジャンプします。しかし、どうでもいいことですが殺し屋さんの声がすごく高いです。女性の殺し屋なのでしょうか？

「なんだ……お金持ってないのか」

「いえ、持ってますけど？」

つい僕が正直に答えてしまうと、驚いたような声が後ろからあがります。

「だってチャリンチャリン、って音しなかったのに」
「この不良ですかあなたは。」

「ああ、硬貨は持っていませんが千円札を持っていますよ」

「そうか………そういえばお金にはそういうものもあつたっけ。ここ3年くらい見てなかったから紙幣の存在を忘れてた」
思わず涙が出そうな独白でした。

というか、目の前の貧乏屋敷に、このセリフ。

「あなた、宇野ちあきさんですか？」

「エスパー伊藤かお前？」

仮に僕がエスパーだとしても、なぜ伊藤をつけるんでしょうか？

エスパーの人はみんな苗字が伊藤だとも思っているんでしょうか。もしそうなら伊藤の血族はもつと繁栄してると思いますよ。

「僕は明美さんから紹介されて、妖怪退治に来た佐藤太郎です」

「なんだ。そうならそうと早く言えばいいのに」

あなたの姿を確認する前からカツアゲされそうになったんですがね。
「悪かった。こっち向いていいよ」

僕と、ついでに人間には見えないはずなのになぜか今までちあきさんの言う通りにしていたシキが振り向くと、そこには宇野ちあきさんが………。

「なに？ あたしの顔になんかついてる？」

じろじろ見てしまったせいかな、不満げな声で言うちあきさん。いや、40歳以上が守備範囲の僕ですから、いやらしい意味で見続けたのではありません。ただ単純に、その神の芸術とでも言いたくなるようなちあきさんの容姿に目を奪われてしまったのです。見ればシキも同じようで、「これはとんでもなくマブいな！」と興奮した様子。

ちなみにマブいの意味を最近の若い人たちはどれくらい知っているのでしょうかね。

「ちよつと思っていた印象と違ったもので……。すみません」

「まあいいや、それより仕事の話しましょう」

そう言つてさつさとビニールシートをくぐるちあきさん。どこでもドアですねまさに。ただし、どこにでも行けるドアというわけじゃなく、どこからでも入れるという悲しい意味ですが。

「どうぞ、狭いとこだけど、遠慮しないで」
ビニールシートの中からちあきさんが言います。

さすがに狭いのは見れば分かりますし、ここに入るのに遠慮をするほど謙虚な人間にはなれないので、僕とシキは素直に「では入りませ」といつてブルーシートをくぐりました。

狭い。その一言に尽きました。

そして視界が青い。ブルーシートを通っているため、光が青くなつてしまうようです。そのせいで、中に居る人間の顔色まで不健康そうに見えてきます。

「なあタロー。ウチは結構な貧乏だと思つてた。でも上には飢えがいるな」

「シキ。その誤字ネタは小説じゃなきゃわかりませんよ」

小声でやり取りをしつつ、僕とシキは目の前に張られた標語を見ます。

「一日一善」ならぬ「一日一膳」。かつてこれほど悲しいパロディ

があつたでしょうか？

そして宇野さんかというと、どこからともなくラベルのないペットボトルを取り出して、それをこれまたどこからともなく持ってきたコップの中に液体を注ぎます。

「はい」

飲めよオラ、みたいな乱暴な手つきでそのまま渡されます。

「……」

あ、そうかお茶の代わりか。いやむしろこれならわざわざ出してもらわなくても良かったのですが。めっちゃめっちゃ飲みたくないです。みた感じどう見ても水ですが、ラベルのないペットボトルから注がれているので恐すぎます。常温で保管してましたし。しかもコップ汚っ！

「大丈夫。毒とか入ってないから。朝、公園で汲んできたばかりだから新鮮だ」

宇野さんは少し新鮮と言っ言葉を誤解しているようです。シキもそれはねーよみたいな目でこちらを見えていますし。

しかしそんなことにおかまいなしに、ワシの杯が受けられないんかい！ みたいな感じで宇野さんはアゴをクイツと前後させて、僕に飲むように促します。

悪気は無いんですが、ありがた迷惑とはまさしくこのことです。

「そーれイツキ！ イツキ！」

無責任なことを言うシキにゲンコツを落とすし（宇野さんはあからさまに目を逸らしていました。シキの姿が見えないから僕が奇行にはしっているように見えたのでしょうか）僕は仕方なく飲み干します。

宇野さんもこの水を飲んでいるのでしようから、死ぬようなことは無いでしょう。

「あ、悪いそれ3日前のだった」

「ブッフオオゲハツ、ハツ、エホツ」

「冗談だよ。あはは」

宇野さん、一発殴ってもいいですか？

そのとき。

「ねーちゃんただいまー」

ガリガリに痩せた、欠食児童みたいな子供がビニールシートをくぐって入ってきます。

服と言うか、襪襦切れを纏い、これで外をあるいたらすぐに警察に保護されそうな出で立ちです。

「ちあきさんの弟さんですか？」

僕が問うと、

「違う」

なぜかシキが答えます。

「こいつ人間じゃない」

そう言つて、するどく男の子を睨みつけます。はたから見れば、子供が拗ねて居るようにしか見えませんが。

とはいえ、人ではない、ですか。

僕はあまりによく妖怪が見えてしまうため、人と遜色ない姿の妖怪はついつい人間と勘違いしてしまいます。

「なあねーちゃん。こいつら何？」

男の子がいぶかしげにちあきさんに問うと、当のちあきさんは吐き捨てるように答えます。

「お前をここから追い出すために来てもらった人たちだ」

「ああ、ついに育児放棄されるのか僕……」

「人聞きの悪いことを言うな！ 第一お前は私の弟でもなければウチの子供ですらないだろう！ お前のせいでウチは！ こんなに貧乏になってしまったのに！」

激昂するちあきさんを宥めつつ、僕はちょっと涙目になっている男の子に話しかけます。十八番の太郎スマイル付きで。

「僕は佐藤太郎といひます。君の名前を覚えてもらえますか？」

「無銭貧太。……そいつ何？」

貧太が指差すのはシキ。それを不思議そうに見ているちあきさん。
ん？ 一つ疑問が浮かびます。

「シキ、ちあきさんにはどうしてお前の姿は見えないのに、貧太君の姿は見えるんだ？ 霊能力があるなら、二人とも見えるはずなのに」

「そいつ貧乏神だもん。貧乏神はとり憑いた家の人間には見えるよ
うになるからな」

なるほど。霊視できる僕は別として、ちあきさんに霊能力が無いの
に見えるのはそういうわけですか。

「あなた、誰と話してるの？ シキってなに？」

ちあきさんが気味悪そうに訊いてきます。見えないので別にいいか
と思っただけですが、紹介したほうが良さそうです。

「実は、ここには座敷童子のシキという子がいます。霊能力の
ないちあきさんには見えないでしょうが、その貧太君は貧乏神な
ので見えるはずですよ」

ちあきさんが口を利くのも嫌そうに、「……そうなの？」の貧太君
に問いかけると、彼は嬉しそうに頷きます。ちあきさんが訊いてく
れたことが余程うれいんでしょうか。なんかすごい健気な子に思
えてきました。

「つまり、貧乏神のせいだ。宇野さんはこんなに貧乏になってしまった、というわけですね。それでなんとかして欲しい、と」
宇野さんは頷きます。

「んなこと言われても仕方ないじゃん。だって俺貧乏神だし……。レベル上げても転職とかできねえし」
貧乏太君が口をとがらせます。本人の性質ゆえ、努力ではどうにもならない部分なのでしょう。ダーマ神殿とか現実にはありませんし。

「まあ話はわかった。要はコイツをボコって追い出せばいいんだろ？ まかせろ。貧乏神ごとき座敷童子の幸福パワーでひねりつぶしてやるわ！」

シキが貧乏太くんを指差します。当の貧乏太くん、めっちゃビクビクしています。

「てか幸福パワーの使い方が激しく暴力的で、どう考えても使用法を間違ってるように思います。」

「落ち着けシキ。暴力では憎しみしか生まれません。もっと平和的な解決をしよう」

「タロー、速やかなる平和のためには今、血を流さなければならぬんだよ」

「なんか深いこと言ってるように見えて要約するとめんどいからさっさとボコって終わりにしようぜ、ってことですね。」

「帰ったらシキの倫理観とかいろいろと再教育する必要があるそうです。」

「ちよつと、話が見えないんだけど。そのシキって子となにを話してるの？」

「僕の発言しか聞こえない宇野さんが、怯えている貧乏太くんを見て取って問いかけてきます。」

「ねーちゃん、助けて！こいつら俺を殺そうとしてる！」

貧太君、いくらなんでもそれは大げさに言いすぎです。

むしろ僕は平和的解決を提案していたというのに。

「殺すって……。別にそこまでしなくても……」

宇野さんも若干引き気味に貧太くんを庇います。まあ、貧乏にされたからといって、さすがに殺すのなのなんだのといったところまでの憎しみはないのでしょうか。

さて困りました。

すでにシャドーボクシングで臨戦態勢に入っているシキ。

追い出したいけどあまり酷いこともしたくない宇野さん。

元凶ではあるけれど、それは貧乏神という性質ゆえで自身には悪気がない貧太君。

シキはとりあえず放置しておくとして、やっぱり一番の問題は貧太君です。

そもそも、なぜ貧太君は宇野さんの家にいるのでしょうか？ そのあたりを明確にするひつようがありそうです。

「貧太くん、すこし二人でお話ませんか？」

「タロー、そいつ拉致るなら私も手伝うぞ！」

「すこし黙ってなさいシキ。じゃないと今日の夕食をダンボールにしますよ」

「……………」

食べ物の人質にするとシキはとても良い子になります。

「……………あんまり遠くへ行かねーんなら、いいよ」

唇をとがらせて、しぶしぶといった様子ながらも承諾を得たので、

僕は家の外に貧太君を連れ出しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6218e/>

タローと座敷童子

2011年9月18日23時08分発行